

学習院女子短期大学 国語国文学会 会報

22

平成5年2月

学習院女子短期大学

国語国文学会
電話 東京(03)31906代表
振替 東京六一三六四

〒162 東京都新宿区戸山三丁目二〇番一号
学習院女子短期大学国文学研究室

人称の場

高橋 新太郎

日本語の第二人称の多様さがよく言われる。これは一人称についても同様だろう。自分でも、時、處、その場の気分によつてワタクシ・ボク・オレを自在に使用している。

数年前に二十九歳の若い命を癌で失つたわが友山内美穂は、十代から週刊誌のフリーライターをつとめながら、作家を目指していた。彼女は女性をしか愛せないヒトだった。童顔の美穂さんは、自らをワシと言い慣らわし、共生の相手をオマエとよび、話題にするときはウチノツマハ……と、はにかんだ。

ボクはウチノカミサンのことをアナタと呼び慣らわしてきた。彼女が三歳年長であつたから敬意を表してそう呼んだわけではないのだが、当たらずさわらずの、多少よそよそしい感じのあるこの呼び方が、なんとなく氣に入つていた。ニヨーボーもボクをアナタと呼んでいたが、娘が生まれてからは、トウチャヤマと呼ぶことが多くな

った。三十近い口うるさい女を子供に持つた覚えはないと言つてみたい気もしたが、この子供中心のよび方にになじんでしまつた。娘が成長して嫁に行つた。娘夫婦の会話を聴いてみると、ムコ殿は、自分の妻をキミ、娘は夫をアナタとよび、時には老人に耳障りな愛称でよび合つている。フランス語を習い初めの頃に「tutoyer」なるものを知つた。*(volz)*から*(tu)*への呼び変えが、人間関係の親密度の深まりの証しだることだつた。アナタからオマエへの呼称の変化と言つてもよいだろう。

娘が高等科に上がりたての頃だつたようにおもう。常になつていいさかいを母子でしたことがある。日ごろ母親をオカアチャマとよびならわしていた娘が、「アナタハ、ソウ、オツシヤルケレドモ……」との突然の他人行儀の開き直りに、カナイは鼻白むてしまいおもわず絶句してしまつたことがあつた。この健気な、娘の親離れの快挙に小生が拍手を送つたことは言うまでもない。もちろん心の内のことだが。

男子高等科で、血氣盛んな若者達を相手にしていた頃は、オレ、オマエで通した。いささか乱暴な言い方ではあるが、それなりの濃密な人間関係であつたように思う。短大に移つて女性専科となつて

からは、学生をアナタとよぶことにした。いささか隔りを置いた呼称を可としたのである。その故でもあるまいが、学生の名前と顔を覚えることが少なくなった。これは年齢からくる記憶力の減退によるものばかりではないと、私は思っている。

感謝して生きる

第二十回卒業 近藤三枝

早いもので短大を卒業してから二十二年余り経つてしましました。この年になると、自然とお年寄りの世話ををする機会も多くなっています。最近も対照的なお二人を見る機会がありました。一人のおじいさんは軽い痴呆症でしたがとても腰の低い方で、相手が誰だかわからなくとも何かしてもらう度に「どうもありがとうございます。」「申し訳ございません。」と丁寧に頭を下げられるのです。看護婦さんの間でも「いいおじいさんね。」といつも評判でした。またもう一人のおばあさんは脳梗塞という病気の為か、声をかけても返事もせず反対の方へすっと顔をそむけてしまい、「口の中をふきましょうね。」と言うと逆に口をぎゅっと結んでしまうのです。看護婦さんは笑いながら「また嫌われてしまつたわ。」と言つておりましたが、病気で無意識ながらも不満げな、素直でない態度をしてしまうおばあさんは見ていて本当に氣の毒でした。このお二人の違いはどこから來るのでしようか。普段私は自分が必ず将来「老・病・死」を迎えるなければならないということについて余り深く考えて生活しておりませんでした。でも今までの生

き方が七十才八十才になつて、しかも病気の場合無意識のうちに出てはいけないとつくづく思いました。

またもう一人、八十二才になられる書道の先生は、ご主人をなくされた後もお香の会をなさつたり、書の審査員をなさつたり、お弟子さんを育てたりとお元気で活躍されておられいつも「主人のおかげで。」「息子のおかげで。」「嫁のおかげで。」と周囲に感謝しながら、生き／＼と暮していらっしゃいます。その先生には和漢朗詠集や萩帖を教えていただくと同時に、それ以上の貴重な人生勉強をさせていただいている今日この頃です。

「つれづれなるままに…」

第三十三回卒業 東里秀美

早いもので学短を卒業してから九年が経つた。今では会社でも中堅の仲間入りをし、それなりに忙しい毎日を送っている。

私の仕事はコンピュータ・インストラクターで、コンピュータのユーティリティ操作方法やプログラミングを教えている。講習会に来られる受講者の年代は二十代から四十代以上と非常に幅が広い。レベルも差があるので、同じ事を教えて理解してもらうまでが色々大変である。講習会の登壇は一年のうち約八十日から九十日だが、自分で満足できた登壇は少ない。一年のうち二回から三回位あれば良い方である。まだまだ自分は努力が足りないのだろう。もっと余裕を持つて登壇したいと思う。